

## (要旨)

ナガミーズ語の典型的所有文は永続的所有を表す A laga B ase 「A の B が存在する (属格 =laga)」と一時的  
所有を表す A logote B ase 「A と共に B がある (社格 =logote)」であるが、所有権や所有の持続期間を指定し  
ない中立的な形式として A..B ase 「A は B がある (主格 =Ø、「A は B である」というコピュラ文と同形)」  
というトピック=コメント型の所有構文が存在する。この構文はコピュラ文との混同を避けて A と B が一致  
しない名詞の組み合わせの場合に現れ、仮に A が単数の有生物主語であれば B にはそれと一致しない無生物  
や複数の有生物が被所有名詞として選好される。また、A は文頭の位置に主格形で置かれ、A と B が直接並  
んでいる場合よりもむしろ A と B の間に挿入句がある場合や B の直前に長い修飾語句がある場合に A は文  
全体のトピックとして機能する。

## (予稿)

## 0. ナガミーズ語について

ナガミーズ語 (Nagamese) はインド北東部ナガラランド州 (Nagaland) とその周辺域で話されるクレオール言  
語で、インド・アリア系のアッサム語 (Assamese) をドナー言語とし、チベット・ビルマ系のナガ諸語がホ  
ストとなって主にナガ系諸民族の間での非公式な共通語として推定 200 万人以上に使用されている。ナガラ  
ランド州の公用語は英語であり、ナガミーズ語の法的地位は明らかではない。ナガミーズ語はナガ・ピジン  
(Naga Pidgin) と呼ばれるが、実際にはこの言語を第一言語あるいは母語とする話者も数万人以上存在して  
いるとみられ、家庭内で親から子へと継承されていることからクレオール言語と見なすのが適切である。  
ナガミーズ語は 1971 年以前の旧アッサム州領地域に分布するアッサム語系クレオール諸語の一つであり、そ  
の原型の成立は数百年前に上アッサム地方のアホム王国 (Ahom) とナガ系諸民族の交流が始まった時代にま  
で遡ると考えられる。ナガミーズ語はアッサム語との間に部分的な相互意思疎通性があり、アッサム語と比  
較して動詞の人称変化の喪失、時制の単純化、格の合流、類別詞の不使用などを特徴とする。ただしアッサ  
ム語を模したスタイルの選好あるいはアッサム語に近づけた表現形式をあえて取ろうとする話者の判断によ  
り、アッサム語に存在するいかなる表現もナガミーズ語に現れうる。また、ナガミーズ語は長らく文字表記  
されることなく書き言葉を持たなかったため未だ標準化意識に乏しく、各地域の各民族ごとに様々な下位変  
種が存在する。それでもナガミーズ語は 2013 年に日刊紙が (現在は不定期更新のデジタル版へ移行)、2018  
年に新約聖書の全訳が刊行され、2010 年代以降書記言語としての発達が顕著に見られるようになった。ナガ  
ミーズ語は近年インドの連邦公用語であるヒンディー語の影響を強く受けており、教育環境の改善や各種メ  
ディアの発達を通してのヒンディー語の普及に伴ってナガミーズ語の地位も揺らぎつつある。ナガラランド州  
の中でも特にインド本土からの流入民の多い最大都市ディマプル (Dimapur) ではヒンディー語の使用機会  
の増大に伴ってナガミーズ語の変質が急速に進んでおり、また会話途中でのナガミーズ語とヒンディー語と  
の間のスイッチング現象も頻繁に観察される。本発表ではナガミーズ語を第 1 言語とする話者 2 名および第  
2 言語として流暢に話す 2 名からの聞き取りに従って州都コヒマ (Kohima) とその周辺域で話される変種を  
元に記述を行う。

## 1. ナガミーズ語の音体系

1.1. ナガミーズ語の音節構造は (C)(C)(V)V(C)(C) であり、声調を持たない。

1.2. ナガミーズ語の単母音は /a/ ([ə]~[a]), /i/, /u/, /e/ ([e]~[ɛ]), /o/ ([o]~[ɔ]) の 5 種類であり、母音の長短の対立は存在しない。アッサム語から /o/ と /ɔ/ の対立は元々引き継がれていないか、あるいは既に失われている。一方で /u/ と /o/ の交替が頻繁に観察される。

1.3. ナガミーズ語の子音と対応する表記法は以下の通りである。

/k, kʰ, g, ŋ, tɛ, dʒ, t, tʰ, d, n, p, f, b, m, j, r, l, w, s, h/

<k, kh, g, ng, ch, j(=z), t, th, d, n, p, ph(=f), b, m, y, r, l, w(=v), s, h>

アッサム語とヒンディー語の有声帯気音 (/gʱ/, /dʒʱ/, /dʱ/, /bʱ/) は表記上は gh, jh, dh, bh のように書かれることはあってもナガミーズ語では一貫した音素として認められず /g/, /dʒ/, /d/, /b/ にそれぞれ合流していると思なされる。ヒンディー語の帯気音 (/tʰ/) はナガミーズ語では一貫した音素としては認められず、/t/ に合流していると思なされる。ヒンディー語の反舌音 (/ʈ/, /ʈʰ/, /ɖ/, /ɖʱ/, /ɳ/, /ɽ/, /ɽʱ/) はナガミーズ語でそれぞれ /t/, /tʰ/, /d/, /dʰ/, /n/, /r/, /r/ に対応する。ただし、母音間の /r/ が [ɹ] のように反舌化して実現されることがある。アッサム語標準語の /x/ はナガミーズ語の /h/ ([h]~[χ]) に対応し、ヒンディー語で /kʰ/ が [x] で実現されるものはそのままナガミーズ語でも [x] で実現される。[s] と [ɕ] はそれぞれ表記上では s と sh で区別されるが、互いに /s/ の異音関係にある。

## 2. ナガミーズ語の形態論の基礎

2.1. ナガミーズ語は SOV 型の膠着語である。

### 2.2. ナガミーズ語の人称代名詞

人称 / 数	sg	pl
1	moi, ami	moikhan, amikhan
2	toi, tumi	toikhan, tumikhan
2. honorific	apuni	apunikhan, apunilok
3	tai	taikhan

ナガミーズ語の 3 人称代名詞には性の区別が無く、アッサム語標準語の女性形の tai が男性にも使われる。また、アッサム語の標準語で ami は「私たち」であるが、ナガミーズ語ではベンガル語と同じ単数形として扱われる。目上の人に対しての尊敬形の使用は厳密ではない。

2.3. ナガミーズ語の使用頻度の高い指示代名詞は近称が itu / ye、遠称が otu / vo である。

### 2.4. ナガミーズ語の格標識

主格=Ø, 属格 =laga, 与格 =loi, 対格 =ke, 社格 =logo, 所格 =te, 奪格・具格 =pora

ただし、この中で与格と社格は =loi=te, logo=te のように所格で二重に標識されることが多く、=loi, =logo 単独では格標識として認識されなくなっているとも考えられる。くだけた口語では =laga > =la, =ke > =k, logo / logo=te > lo, =te > =t, =pora > =pra の短縮形も使用される。与格の =loi には =le の異形も存在する。アッサム語の -(V)r に由来する属格形も存在し、人称代名詞は mor, tor, tar, amar, tomor / tumar, apunar などの属格形を持つほか、前 3 者はこのままの形で主格形の moi, toi, tai と同様に主格代名詞として用いられることがあ

る。また、mor=laga, tor=laga, tar=laga のように =laga を用いて二重に属格標識されることが多く、-(V)r 型の属格形は単独では既に属格として認識されなくなっている可能性がある。laga と logo は共通の語根 √lag「付く」に由来する。=ke は対格のみならず与格あるいは受益者標示にも用いられ、二重目的語文でも直接目的語と間接目的語の双方に =ke を用いることが出来る。また、奪格・具格の =pora が動作主の標示に用いられることがあるが、アッサム語と同形の =e が動作主に付加されることは稀である。

### 3. ナガミーズ語の所有文

ナガミーズ語では have 動詞に相当するものが用いられず、「A は B を持つ」と翻訳されうる所有文はコンピュータ動詞兼存在動詞の ase (人称変化なし) を用いて

#### I. 属格所有 A laga B ase. 「A の B がある」

のように表現される。ただし、これはコンピュータ動詞を用いた定義文とは形式上区別されない。

例として

(1) *Moi laga kutta ase.* 私は犬を飼っている。 / 私の犬です。

(2) *Apuni laga nadikhai talent ase.* あなたには隠れた才能がある。

この I は主に被所有物が永続的に所有者に属している場合に用いられ、一時的所有を表す場合には

#### II. 社格所有 A logote B ase. 「A と共に B がある」

が用いられる。B には基本的に所有の移転が可能な名詞が選ばれる。

(3) *Tai logote moi laga phone ase.* 彼が私の携帯電話を持っている。

(4) *Tai logote bachakhan ase.* 彼の所に子供たちがいる。

この場合、「彼」は子供たちを一時的に預かっていると解される。しかし、

(5) *Tai logote ghor ase. (?)* 彼のところに家がある。(?)

は家がよほど小さく車輪でも付いていない限りは不適切な文となる。何故なら ghor「家」は持ち運んで他人に渡したりすることによる一時的な所有が一般に想像し得ないからである。

以上の I, II がナガミーズ語の最も典型的な所有文である。その他、与格標識を用いた

#### III. 与格所有 A loite B ase. 「A のために B がある」

も存在するが、これが用いられるのは主に病気に関する表現である。

(6) *Tai loite C-virus ase.* 彼は C-ウイルスを持っている。 / C-ウイルスに感染している。

A が空間的広がりを持つ場所や地名の場合、A が内部構造を有しており被所有物の位置や分布に構造的偏りがある場合、あるいは A が有生物の身体部位である場合には

#### IV. 所格所有 A te B ase. 「A に B がある」

も所有文として理解可能である。

(7) *Nagaland te bisi jatikhan ase.* ナガランドは多くの民族を有する。 / たくさんの民族がいる。

(8) *Otu sundar phul te poison ase.* その美しい花は毒を持っている / その美しい花には毒がある。

(9) *Tai laga theng te kala dak ase.* 彼は足にほくろがある。

また、この派生形として、A laga hath te B ase. 「A の手に B がある」という言い方も実際には被所有物を手に握っていなくても抽象的に用いられることがある。

I-IV はドナー言語のアッサム語に限らずインド・アリア諸語に広く見られる所有文の形式であるが、これらに加えてナガミーズ語にはトピック=コメント型の所有文が存在する。

V. トピック=コメント型所有 A...B ase. 「A は B がある」

(10) Chota bacha bhi freedom of speech ase.

<i>teota</i>	<i>batea</i>	= <i>bi</i>	<i>f. o. s</i>	<i>ase</i>
small	child	also	freedom of speech	exist

小さな子供にも言論の自由がある。

この文においては所有者の *chota bacha* 「小さな子供」に何の格標識も付いておらず、かつ *freedom of speech* も主格形である。存在しているのは「言論の自由」であるから、最初の「小さな子供」は文のトピックと解され、それに対して「言論の自由がある」という所有のコメントを加えていると考えられる。この例ではトピック主語 *chota bacha* の直後に義務的な休止や文イントネーションの変化も確認されない。

ただし、V には様々な制約がある。

一般にこの構文ではコピュラ文との混同を避けるため、被所有物は所有者主語と一致しえないものである必要がある。例えば被所有名詞が有生物の (1) から属格標識 *laga* を取り去った

(11) *Moi kutta ase.* は「私は犬を飼っている」ではなくコピュラ文の「私は犬だ」と解される。

また、被所有物が無生物であっても

(12) *Tai laptop ase. (?)* 「彼はノートパソコンを持っている」(?)

は容認度が低いか、話者によっては非文と判定される。

ところが *ghorte* 「家に」を挟んだだけの

(13) *Tai ghorte laptop ase.*

彼は家にノートパソコンを持っている。

は所有文として理解可能である。これだけでは文頭の *Tai* の機能が明らかではないが、

(14) *Tai moi laga ghorte nijor laga laptop ase.*

彼は私の家に彼自身のノートパソコンを持っている。

この場合 *nijor* 「自身の」は「彼」のことと解釈され、文頭の *Tai* はトピック所有者主語である。

(15) *Moi Kohimate bachakhan ase.* 私はコヒマに子供たちがいる。

<i>moi</i>	<i>Kohima</i>	= <i>te</i>	<i>batea</i>	<i>-k<sup>h</sup>an</i>	<i>ase</i>
I	Kohima	LOC	child	PL	exist

この文において *Moi* 「私」と *bachakhan* 「子供たち」はどちらも主格形であり、存在動詞 *ase* の主語は *bachakhan* で *Moi* は文のトピックとして解釈される。この場合、「私」は必ずしもコヒマと一緒に住んでいるかどうかは分からない。

「コヒマ」を前置した

(16) *Kohimate moi bachakhan ase. (?)*

は一応は (15) と同義の所有文としての解釈が可能であるが、(15) に比べて話者の容認度が下がる。これに

より、典型的なトピック所有文では文頭に所有者名詞が主格形で現れる必要があると考えられる。

以下に述べる *laga* と *logote* を用いた所有文では所有の永続性・一時性あるいは被所有名詞と所有者名詞の関係についての区別が可能であるが、(15) のようなトピック所有文にはそのような言及がなく中立的な表現となる。ただしこの場合は被所有名詞の *bachakhan* 「子供たち」から最も自然に想定される所有者である「親」=「私」と判断される。

(17) *Kohimate moi laga bachakhan ase.*

コヒマに私は(私自身の)子供たちがいる。(親だけと一緒にいるかは分からない)

(18) *Kohimate moi logote bachakhan ase.*

コヒマで私は子供らと一緒にいる。(一緒にいるけど親かどうかは分からない)

*Moi* で文を始めて属格標識の *laga* を *Kohimate* の前に置いた

(19) *Moi laga Kohimate bachakhan ase.*

私はコヒマに子供たちがいる。(親だけと一緒にいるかは分からない)

も可能であり、*laga* は *Kohimate* を跨いで *bachakhan* を修飾していると解され、(17) と同じく「私」が子供たちの親あるいは保護者であることを明示している。

(20) *Moi logote Kohimate bachakhan ase.*

私はコヒマで子供らと一緒にいる。(一緒にいるけど親かどうかは分からない)

この場合は (18) とほぼ同義になり、「私」はコヒマで子供たちと一緒に住んでいると解される。

「私」は必ずしも子供たちの親また保護者とは限らず、単なる居候か同居人か、あるいはコヒマの学校の先生である可能性がある。

また、(15) のトピック所有文で子供を単数形にした

(21) *Moi Kohimate bacha ase.*

は「私はコヒマに子供がいる」と「私はコヒマにいる子供である」の両方の解釈の可能性がある。この場合「私」が大人であるか子供であるかの情報が無ければ判断は出来ない。

被所有名詞の前に修飾語句がある場合にもトピック所有文が現れる。

(22) *Nagaland dangor autonomy pabole hosa ase.*

*Nagaland dangor autonomy pa -bo -le hosa ase*

I big autonomy gain FUT SUBJ right exist

ナガランドは大きな自治を得る権利がある。

同様にトピック主語が現れやすい所有文として、複数の所有関係が連続し所有に埋め込み階層がある場合に属格の連続を避けて *laga* が所有者名詞に用いられない例が挙げられる。

(23) *Moi tai laga sathi laga cousin laga phone ase.* 私は[彼の友人の{いとこの携帯電話}]を持っている。

この文でも文頭の *Moi* はトピック主語となり、*tai laga...phone* が存在するというコメントを受けて所有文を成している。

携帯電話を一時的に所有していることを明示したければ社格の *logote* を用いて

(24) *Moi logote tai laga sathi laga cousin laga phone ase.* 私が彼の友人のいとこの携帯電話を持っている。  
と言ひ換えられる。

他人のものであるはずの携帯電話を「私」が永続的に所有していることを示したければ、語順を変えて *moi laga* の位置を移す必要がある。

(25) *Tai laga sathi laga cousin laga phone tu moi laga ase.* 彼の友人のいとこの携帯電話は私のものだ。  
これは「私」に所有権があることを表明する文となる。*tu* は照応の小辞として使われている。  
*moi laga* を文頭の位置に持ってきた

(26) *Moi laga(.) tai laga sathi laga cousin laga phone ase. (?)*  
は非文として避けられるか、文の発話時に最初の *moi laga* の後に休止 (.) が置かれる。

トピック所有文の (23) は (24) と同様に一時的所有を表すと解されるが、それは携帯電話という被所有物を持ち主以外が持っているならば一時的な所有とするのが自然な解釈であるという、被所有名詞自身の持つ性質による。

以上 (15) と (23) の例から *laga* も *logote* も使われない所有文は所有権や所有の持続性を含意しない中立的表現であり、所有関係は被所有名詞の意味から判断されていることが分かる。

また、「髭が生えている」はトピック所有文になる。

(27) *Tai dari ase.* 彼は顎髭が生えている。

(28) *Otu manu bisi mus ase.* あの人は口髭が濃い。 / たくさんの口髭がある。

*dari* や *mus* は名詞であって形容詞としての用法は無いので、これらはトピック所有文として解される。

#### 4. トピック所有文の起源

(29) *Moi ghorté jabole mon ase.* 私は家に行きたい。

<i>moi</i>	<i>gor</i>	<i>=te</i>	<i>ja</i>	<i>-bo</i>	<i>-le</i>	<i>mon</i>	<i>ase</i>
I	house	LOC	go	FUT	SUBJ	mind	exist

これはナガミーズ語の日常会話で頻繁に使われる「～したい」という願望や欲求を表す基本的な文の一種であるが、文頭の *Moi* には何の格標識も為されないまま「私は～する心がある」というトピック所有文として解される。おそらくはここから「権利」や「能力」などの他の抽象名詞に対してもトピック所有文が用いられるようになって行き、次第に「子供」や「携帯電話」などの一般名詞の所有にまで用法が拡大していったのではないかという仮説を筆者は考えている。ただし何故 (29) 自体が *laga* 「付く」などの動詞ではなく存在動詞 *ase* を取っているのか、また文頭主語に格標識が無いのかについては不明のままである。

(30) *Kutta tu manu laga kotha bhujibole dimak ase.* その犬は人間の言葉が分かる知能がある。

<i>kutta</i>	<i>tu</i>	<i>manu</i>	<i>=laga</i>	<i>kot'a</i>	<i>budzi</i>	<i>-bo</i>	<i>-le</i>	<i>dimak</i>	<i>ase</i>
dog	that	human	GEN	talk	understand	FUT	SUBJ	brain	exist

ここでも *kutta* が格標識のない文頭トピック主語で、(～するための) *dimak* 「知能」があるというコメントをトピックに対して付け加える文構造となっている。

(31) *Moi laga boini meeting te join koribule hak ase.* 私の姉はミーティングに参加する権利がある。

*moi =laga boini meeting =te join kori -bo -le hak ase*  
I GEN sister meeting LOC join do FUT SUBJ right exist

このように文頭主語に修飾語句が付いて *moi laga boini* のように長くなっていたとしても、トピック主語として機能する。

## 5. まとめ

ナガミーズ語のトピック=コメント型所有文 "A...B ase." は所有権や所有の持続に関して中立的な表現であり、 $A \neq B$  の条件下で文頭に所有者である A が置かれ動詞 ase までの部分に被所有名詞 B の修飾語句を含めた何らかの語句が介在している場合に現れる。この構文は B として *mon* 「精神」を用いた *A...mon ase.* 「A は～したい」という文と形式が共通している。

## 参考文献 (出版年昇順)

Sreedhar, M. V., *Naga Pidgin : a Sociolinguistic Study of Inter-Lingual Communication Pattern in Nagaland*, Central Institute of Indian Languages, Mysore, 1974

Goswami, Golockchandra, *Structure of Assamese*, Department of Publication, Gauhati University, [Guwahati], 1982

Sreedhar, M. V., *Standardized Grammar of Naga Pidgin*, Central Institute of Indian Languages, Mysore, 1985

Boruah, B. K., *Nagamese : the Language of Nagaland*, Mittal Publications, New Delhi, 1993

Baishya, Ajit Kumar, *The Structure of Nagamese : the Contact Language of Nagaland*, thesis submitted in fulfillment of the requirement for the award of the degree of Doctor of Philosophy, Department of Linguistics, Assam University, Silhar, 2003

Boruah, Bhim Kanta, *Dictionary of Nagamese Language : Nagamese-English-Assamese*, Mittal Publications, New Delhi, 2014

Aye, N. Khashito, *Anglo-Nagamese Grammar : the Lingua Franca of Nagaland : Translated into English and Sïmi*, Revised 2nd ed., ATICOS Publications, Dimapur, 2015

Mahung, Sally, *Nagamis into Tangkhul : Translation, Vocabulary, Sentences and Conversation : Part 1*, Benjamin Mahung & Serinah Risom, [Imphal], 2016

Jamir, C. Bendang (ed), *Nagamese Baptist Mondoli Hobha Mondoli Solua Niyom (NBCA Church Manual)*, Nagamese Baptist Mondoli Hobha, Dimapur, 2016

今村泰也『所有表現と文法化—言語類型論から見たヒンディー語の叙述所有』、ひつじ書房、2017

ウェブサイト (2020年10月16日最終閲覧)

<https://nagamesekhobor.com/> (ナガミーズ語のニュースサイト)

[https://door43.org/u/Door43-Catalog/nag\\_obs/master/](https://door43.org/u/Door43-Catalog/nag_obs/master/) (ナガミーズ語で書かれた聖書に関する物語)

[https://git.door43.org/STR/nag\\_isv](https://git.door43.org/STR/nag_isv) (ナガミーズ語の電子版新約聖書)

Special thanks to: Daili Chodona, Kaihrii Chodona, Esha Ariicho, Daniel Ariicho, David Meitei